

高木陸郎と辛亥革命

——盛宣懷の日本亡命を中心に——

吉塚 康一

目次

はじめに

第一節 高木陸郎の若年期 一三井物産社員時代まで

第二節 盛宣懷の来日と高木との邂逅 1908-1910年

第三節 盛宣懷の日本亡命 1911-12年

おわりに

(要約)

高木陸郎は、大正から昭和前期にかけて中日実業副総裁として日中間の経済活動に関わり、当時の日本を代表する中国通経済人と看做された。また、日中関係に関する言論を数多く残し、日中双方に影響を与えた。しかしその重要性に拘わらず高木を専門に扱った先行研究は見当たらない。高木の中国活動の原点は、三井物産漢口出張員時代に清末最大の実業家盛宣懷の知遇を得、井上馨の仲介により盛の秘書を務めたことにある。盛は八幡製鉄所の鉄鉱石の主要供給元である大冶鉄山の所有者であり、日本にとり最重要人物のひとりであった。辛亥革命勃発後盛は失脚するが、依然経済的実力を持ち、その身柄を受けようと列強各国の争奪戦の対象となる。盛は最終的に日本を亡命先に選択するが、その過程で重要な役割を担ったのが高木であった。本稿では様々な史料を用い、高木陸郎と盛宣懷の関わり、特に辛亥革命後の盛日本亡命時に高木が果たした役割を明らかにした。

はじめに

高木陸郎は、大正から昭和前期にかけて、日本を代表する中国通経済人と看做された人物である。日本国内の雑誌上で活発な言論活動を展開したほか、中国の経済状況や当時の列強権益を分析する著作を現した¹⁾。日中関係が激動を迎える1930年代、高木は日本に蔓延する中国蔑視や下等国視を戒め、急速に近代化する中国を正しく理解するよう

訴えた。その言論は日本だけではなく、中国側でも注目され、上海の有力な漢字日刊紙『申報』でも紹介されている²。高木のこれらの言論や思想は、豊富な中国ビジネスの経験に裏打ちされたもので、同時代において説得力を持ったが、現代においてもなお研究に値すると考える。しかし意外なことに、高木を専門的に扱った先行研究は見当たらない³。

高木陸郎は、1880（明治13）年10月1日生まれ、16歳まで新潟で育ったあと上京し、16歳で三井物産に入社した⁴。第一期支那修業生として中国に派遣されたのち、漢口出張員時代に清末最大の実業家盛宣懷の知遇を得た⁵。抜群の中国語力と業務能力により盛宣懷の信頼を得た高木は、盛のたつての要請により、1910（明治43）年以降、盛の秘書を務めることになった⁶。

盛宣懷は、清朝末期最大の実業家である。その事業は多岐にわたり、製鋼業・鉄鉱石採掘業・石炭採掘業・船舶運輸業・紡績業・電信電報業・鉄道業・金融業の有力企業を傘下に置いた。その経済基盤から政治的実力を蓄え、1910（明治43）年袁世凱が清朝に罷免された後は郵電部大臣として入閣し権勢を振るった⁷。

1911（明治44）年10月10日に辛亥革命が勃発すると、盛宣懷はその責任を負わされ失脚し、海外亡命せざるを得なかった。しかし、政治上失脚したとはいえ、依然強大な経済力を持つ実力者であった盛は、その身柄を保護下に置きたい列強各国の奪い合いの対象となった。特に、官営八幡製鉄所（1901（明治34）年創業）の主要原料の大部分を盛宣懷保有の大冶鉄山産鉄鉱石に頼っていた日本政府としては、是非とも盛宣懷の身柄を受けたかったのである⁸。

ただし、辛亥革命直後の日本政府はイギリスとの協調関係を重視する立場から、盛宣懷争奪戦に表立つことは控え、商社と銀行を前面に出して各国と争わせた。最終的に、盛は日本に亡命することになるが、そこで重要な役割を果たしたのが、盛の秘書として傍にピッタリとマークしていた高木陸郎であった⁹。また、盛宣懷の日本亡命は、漢冶萍公司合弁化問題を日本側に有利に展開させることに繋がるが、中国の実力者を日本の影響下に置いたうえで、自身の権益拡大を目指す方策は、その後の日本の大陸政策で繰り返し現れるパターンである。その意味でも、1911（明治44）年の盛宣懷日本亡命に対する研究は、もっと重視されて良いだろう。

本稿の目的は、高木陸郎と盛宣懷の関わり、特に辛亥革命後の盛宣懷日本亡命時に、高木陸郎が果たした役割を明らかにすることにある。盛宣懷の身柄争奪と日本亡命に関する研究それ自身が、その後の日本の大陸政策との関連で重要性を持っていると考える

が、その局面で活躍した人物が、戦前の日本を代表する中国通経済人であり、その言論が日中双方に影響力を持っていたにも関わらず、今まで研究対象とされてこなかった高木陸郎であることで、本稿は二重の意味において重要である。

なお本稿においては、漢冶萍公司および当時の対中国借款に関する先行研究を基礎としたほか、日本外交文書、高木陸郎の回想録、刊行されている盛宣懷史料を参照し、さらには井上馨、山縣有朋、伊集院彦吉、内田康哉ら、日本の元老や政治家、外交官の史料を出来るだけ收拾することに努めた。また本稿のユニークな点として、筆者が上海に赴き、上海図書館が所蔵する未刊行史料「上海図書館盛宣懷档案」の関連資料にも当たったことも付言しておきたい¹⁰。

第一節 高木陸郎の若年期 一三井物産社員時代まで一

高木陸郎は戦前期を代表する中国通経済人と言って差支えないだろう。特に大正後期から昭和前期にかけては、高木による多くの中国論評が残されている。そのためか高木は現在一般的に、当時の肩書で中日実業副総裁として知られる人物である。しかし高木はもともと三井物産の社員である。同社第一期支那修業生として中国語を習得したあと漢口支店を中心に活躍し、盛宣懷の知遇を得てからは、漢冶萍会社の東京代表を務めるなど、盛と大変深い関係にあった。主に人事興信録と回想録によりながら、簡単に高木の前半生を振り返ってみよう¹¹。

高木陸郎は1880（明治13）年10月1日、宮城県黒川郡吉岡町で父（福井藩士）高木これのり惟矩、母（福井藩医師近藤玄真氏女）福子の六男として生まれた。陸郎は六郎の意であり、史料には高木六郎と書かれる場合もある¹²。盛宣懷より35歳年少ということになる。

翌1881（明治14）年、父惟矩が新潟県勸業課長へ転任となり、0歳児であった陸郎を含め家族同伴で新潟市へ転住する。1886（明治19）年1月、父惟矩が死亡。陸郎は5

歳であった。家督は惟矩の長男で、陸郎より10歳年長の高木まきひこ眞木彦が15歳で継いだ。

高木一家はそのまま新潟に残り、陸郎は同年4月に新潟師範学校附属小学校に入学した。長男眞木彦は東京専門学校（現早稲田大学）を卒業したあと帰郷、新潟市立師範学校や新潟商業学校で教師となった¹³。

1894（明治27）年、13歳の陸郎は新潟県立商業学校に入学する。しかし1896（明治29）年、新潟商業学校の学生ストライキを首謀し、追放されそうになった。ところが同校で教鞭を執っていた兄眞木彦のはからいがあったのであろう。學術優等の証明書を送給され上京、東京大手町の東京商工中学校第五年編入試験に合格し、商工中学五年生となった¹⁴。

翌1897（明治30）年、16歳の陸郎は商工中学卒業と同時に、三井物産に入社。本人の回想録によれば90名の受験者中第一番の好成績であったという。しかし三井物産入社に関係し、本人の回想録で奇妙なほど触れられていないが、長兄眞木彦も同時に三井物産に入社している。

眞木彦は1897（明治30）年に新潟商業学校の職を辞し、25歳で三井物産に入社した。10歳年少の弟陸郎と同年入社である。大阪支店、呉出張所、本店営業部、新潟出張所と、主に日本国内でキャリアを積み、本店庶務係で主任（室長級）を務めたあと、化学品専門商社の草分けである三井系の「東京商会」取締役に転身した¹⁵。その後は弟陸郎が社長を務める九州銑鉄の監査役となった¹⁶。

さて弟陸郎は入社二年目の1899（明治32）年1月、同社の第一期支那修業生の試験に合格し、翌月上海に到着した。高木陸郎が一生関わった中国大陸に初めて足を踏み入れたこのとき、陸郎は18歳であった。すぐに南京に赴任し、東亜同文書院で中国語を学ぶこととなったが、当時同文書院には留学生が7、8名いて、山田純三郎もそのなかのひとりであったという。

1900（明治33）年5月、義和団事件の勃発により陸軍通訳に徴用され、1901（明治34）年12月まで1年半にわたり、天津および山海関で軍務についた。三井物産に復帰後は上海勤務となる。このとき第二期支那修業生として森格が上海に派遣され、二人は初めて出会うこととなる。高木陸郎が21歳、森格が19歳のときである。高木は回想録

のなかで森を「少年時代にともに中国に学び、三井物産とともに働^{ママ}らき、しかも中国を舞台に大いに風雲を望まんと契り合った青春時代からの親友」と回顧している¹⁷。

1902（明治35）年5月、22歳の高木陸郎は漢口出張員となった。当時57歳の盛宣懷は、上海に在住しながら、この地域に有力な石炭・鉄鋼関連事業を作り上げ、支配していた。

1899（明治32）年に日本政府は大冶鉄鉱の鉄鉱石と、日本の石炭・コークスとのバーター取引を結んだ。これは二年後の1901（明治34）年に開業する官営八幡製鉄所の鉄

鉄石を確保するための契約である。鉄鉱石の対価となる日本製の石炭・コークスを供給したのは2社で、三井物産および大倉組系の東肥洋行であった¹⁸。1902（明治35）年に漢口出張員として着任した高木陸郎の主な業務も、これらの鉄鉱石や石炭・コークスの物流業務が主なものであったろう。

当時三井物産の中国関連業務を指揮していたのは上海支店長の山本条太郎である。高木陸郎は生涯山本を尊敬したが、1902（明治35）年秋頃、上司の山本に対し給与が低いことを抗議すると、山本は高木に対し「月給のことを考えるなどは愚の骨頂だ。君達は仕事を覚えるために修業生となつたのだから逆に月謝を納めて然るべきである。然るに三井物産は君達に手当を支給して来た。しかも仕事は総て君達の手腕を信じて一任して来たのだから、仕事に不平だというならとにかく、月給に対して苦情をいうなどは何事だ。仕事に熱中し、将来のために仕事を研鑽するというなら、月給など意に介するものではない。云々」と情熱を込めて語った。高木はこの山本の言を座右の銘とし、その後も度々社員に話したという¹⁹。

高木陸郎は三井物産漢口出張員となって以降、盛宣懐の事業への関わりを深め、自分自身も三井物産社内内で出世街道を歩み、ついには三井物産を離れて、日本政府を代表する立場で盛宣懐と向かい合う存在となるのである。

第二節 盛宣懐の来日と高木との邂逅 1908-1910年

近年の研究で盛宣懐の評価は大きく変化している。伝統的な辛亥革命研究においては、その性格を反帝国主義・反封建主義を目指したブルジョア革命であったとする、いわゆるブルジョア革命説が主流であった。清末官僚の中心人物であり、辛亥革命において革命派から糾弾された盛宣懐も、打倒されるべき敵として厳しい評価を下されていた²⁰。

しかし中国のイデオロギー状況の変化に伴い、そのような見方は著しく退潮し、保皇^{ほこう}＝立憲派の辛亥革命成功への貢献が見直されている。国内基盤の乏しい孫文・黄興ら革命派が、最終的に革命に成功した要因は、もともと共和政よりも立憲国家を目指していた立憲派の人々が、革命の最終段階で無能な清朝廷に愛想を尽かし、共和派支持に大きく舵を切ったからである。そのなかで盛宣懐は、清末期の産業近代化を推し進めた事業家として再評価が進んでいる²¹。

日本政府にとって盛宣懷が重要だった理由は、1896（明治29）年に張之洞から大冶鉄鉱の経営権を引き継いだからである。翌1897（明治30）年6月福岡県八幡村に官営製鉄所の建設が着工された。設立当初は岩手県釜石、新潟県赤谷などの国内鉄鉱石を主要原料に想定していたが、1899（明治32）年4月、中国の大冶鉄鉱石購入契約が調印され、これを主原料とすることとなった²²。前述のバーター契約がそれである。

盛宣懷の石炭・鉄鋼事業は、慢性的な資金不足により苦しい経営が続いた。大冶鉄鉱産鉄鉱石の安定供給に必要な日本政府は借款で援助した。1904（明治37）年興業銀行300万円、1906（明治39）年三井物産100万円、1907（明治40）年正金銀行30万円、1908（明治41）年6月正金銀行150万円、同11月正金銀行50万円と借款を重ねた。これらの資金により大冶の生産能力は向上したが、経営は依然苦しかった²³。

そこで盛宣懷は傘下の漢陽鉄廠、大冶鉄鉱および萍郷炭鉱の三社を合併させ、政府持分を廃し完全民営化したあと、新会社名義の新株発行で資金を調達することを思いついた。1908（明治41）年2月、盛宣懷は三社の合併と完全民営化について朝廷に上奏し、許可を得、3月24日には漢冶萍鉄廠鉱股分有限公司として新たに農工商部に登記を完了した²⁴。

臼井勝美氏の研究によれば、1908（明治41）年の大冶鉄鉱による官営八幡製鉄所（若松製鉄所）への鉄鉱石供給は12万7000トンであり、日本側が使用した鉄鉱石の64%が大冶鉄鉱のものであった²⁵。日本政府にとって大冶鉄鉱および漢冶萍公司がいかに重要な地位を占めていたかがわかる。

そのような状況下、1908（明治41）年、63歳の盛宣懷は持病の喘息療養と事業視察のため来日し、3カ月にわたり日本に滞在した。三井物産取締役山本条太郎は、漢口の高木陸郎に命じ、フルアテンドで盛宣懷に同道させた²⁶。当時の高木の中国語能力は既に抜群のレベルに達していたからである²⁷。

盛宣懷は、3ヶ月に渡るこの日本旅行中「愚齋東遊日記」という詳細な日記を残しており、『中国近代化の開拓者 盛宣懷と日本』として日本語でも刊行されている²⁸。8月25日の電報で清朝政府に休暇願を出した盛宣懷は、9月2日に米國船籍「KOREA」号に乗船し²⁹、9月4日に長崎に寄港、続いて9月6日に神戸に寄港し、9月10日に横浜に到着した³⁰。

盛宣懷が長崎に到着した9月4日、高木陸郎は自身の運命を変える人物である盛宣懷と初めて会った。その日の盛宣懷の日記は下記である。

八月九日（新暦で9月4日）晴

風がなく波も穏やかである。船のなかはやや寒い。八時に長崎に到着。長崎は三方を山に囲まれ、市街が縦横に走り、家屋が隙間なく並んでいる。……外務省が派遣してきた書記生深沢〔暹〕^{すずむ}は専用車を用意したと言ってきたが漸った³¹。

この日、船の中まで訪ねて来た中には、中国駐長崎領事王斯沅〔松丞〕^{おうしげん} 刺史、神戸領事に転任した張鴻〔隱南〕^{ちようこう} 太守、長崎県知事荒川〔義太郎〕、三菱造船所丸田〔秀実〕 所長、製鉄所宮本〔桂仙〕 購買長、三井合名会社山本〔条太郎〕 社長が派遣してきた高木〔陸郎〕^{ちんめいきゅう} 氏、および華人商人沈明久^{はんたつしよ}、藩達初^{おうやんじん}、歐陽仁などがいた。高木は漢口三井支店長であつて、深沢もかつて北京や上海などに勤務したことがあり、いずれもわが国の言葉に精通する。よつて、同じ船で同行を願ひ、通訳の便に利するようにした。

当時山本条太郎は、上海支店長から清国総監（在上海）に昇進したあと、1908（明治41）年三井物産本店の理事に昇格して、重役の道を歩み始めていた。盛宣懷は日記の中で山本条太郎を三井物産社長と誤認している。山本の存在感が社長にも匹敵するほど大きく盛宣懷の目には見えたのであろう。また漢口出張員の高木陸郎も支店長と誤認されている。

盛宣懷は9月10日に横浜に到着し、すぐに汽車で東京に向かったが、山本は大倉喜八郎らとともに新橋駅で盛宣懷を出迎えた。9月22日には、山本の案内で、三井財閥の最古の事業である日本橋三越呉服店を見学した。また翌23日にも同じく山本の案内で外務省の深沢暹、盛宣懷の米国人秘書テニー・ファーガソンらをとめない山本の鎌倉別荘を訪問している。さらに翌24日夜にも山本の招きで観劇、さらに29日にも山本が盛宣懷を自宅の茶会に招いている。

日本に滞在中、盛宣懷は伊藤博文、山縣有朋をはじめとした当時の日本のトップリーダーである元勳をはじめ、様々な政財界の人物を訪問し見聞を広めた。三井財閥トップである三井八郎右衛門や三井物産創業者益田孝とも会っており、山本条太郎および高木陸郎は、盛宣懷に対し出来るだけ三井の存在をアピールすることに努めた。その後盛宣

懷は光緒帝と西太后の相次ぐ死去の報に触れ、11月23日慌ただしく長崎から帰国した。高木陸郎もまた三井物産漢口支店へと戻るようになった。

このときの高木陸郎の活躍は、山本条太郎をはじめ三井物産の幹部も大いに評価する所となったようだ。翌1909（明治42）年2月8日、高木は三井物産取締役早川千吉郎を媒酌人として、軍医総監や初代日本赤十字病院院長を務めた子爵、橋本綱常の三女小菊と結婚する。義父橋本綱常はこの結婚式の10日後に死亡するが、式当日すでに危篤状態であったことが新聞報道されている³²。なお橋本綱常は越前藩士橋本左内の実弟である。

同年8月18日東亜興業株式会社が設立された。発起人は日本財界のリーダー渋澤栄一、三井の益田孝、三菱の近藤廉平、大倉組の大倉喜八郎の四名である。村上勝彦氏の研究によれば、東亜興業設立の主要目的は粵漢鉄道建設の工事請負組織であった。粵漢鉄道の終点は漢口である。漢口は同社の最重要拠点のひとつであったと言ってよいだろう。東亜興業の漢口代表は、高木陸郎が兼務していた³³。

高木陸郎は同年9月、外務省政務局長宛てに江西全省鉄路公司に社債を発行させ、東亜興業が借金を提供するという案を提出した。その後高木は日本政府の指示を待たずに行動を開始した模様で、排日運動を警戒する松岡上海総領事代理や渡辺漢口総領事代理が、「高木の自由行動に放任」せず、「此後高木の行動を嚴重に取り締まるべきや否や」至急小村外相に請訓した記録がある³⁴。

さて日本から無事帰国した盛宣懷は、八幡製鉄所を訪問した際の高木陸郎の通訳の正確さと、業務能力を高く評価し、三井財閥の後ろ盾である元老井上馨に宛て、高木を自身の秘書として採用したいと要請した³⁵。井上は喜んで三井に働きかけることを約束し、翌1910（明治43）年1月には、高木は盛の秘書を務めることとなった³⁶。

盛宣懷秘書となった高木陸郎は、三井物産の意向だけではなく、井上馨をはじめとする日本政府の指示に従う立場となったと言える。国立国会図書館憲政史料室所蔵「井上馨関係文書」には、この時期、9月5日付の高木陸郎による井上馨宛書簡が残されている。高木は、盛と井上の書簡往復の仲介者の役割を越え、前月実施された日韓併合により惹起された反日的空気や、米國資本がこの機に乗じて、借金を通じた鉄鉱石や銑鉄の利権獲得を計ろうとしている様子を、詳細に井上へ報告している³⁷。

翌1911（明治44）年に入ると、正金銀行と漢冶萍公司とで、3月600万円、5月600万円、計1200万円という以前に比べると巨額な借款契約が結ばれた。また同時並行で、三井物産からも別途漢冶萍公司に対し50万円の借款が交渉されていたようだ。設備発注

とセット借款である。高木陸郎と上海で盛宣懷と交渉にあたったが、こちらは結局まとまらずに沙汰済みとなった³⁸。

第三節 盛宣懷の日本亡命 1911-12年

1911（明治44）年10月10日の武昌蜂起に始まる辛亥革命は、中国の歴史を画する重大な出来事であっただけではなく、隣国である日本へも大きな影響を与えた。辛亥革命が日本に与えた影響は、伊集院彦吉や宇都宮太郎らの一次史料を駆使した、櫻井良樹氏の最近の研究により、立体的に読み解かれている³⁹。

臼井勝美氏は辛亥革命における日本の対応を四期に分類しているが⁴⁰、久保田裕次氏はこの区分を、日本政府を主語に置き換え説明した。すなわち、日本政府は武昌蜂起の勃発直後には静観の立場をとっていたものの（第一期）、12月上旬の官軍停戦協定でイギリス主導の南北停戦が実現すると、イギリスに追随する形で中国情勢への干渉を試みるようになる（第二期）。そして、清朝の滅亡が迫ると、翌1月1日に成立したばかりの中華民国臨時政府へ接近し、官民双方において様々な利権の獲得行為が政府黙認のもとに行われるが（第三期）、2月12日に宣統帝が退位し、中国情勢が袁世凱によって收拾されると、日本の利権獲得行為もそのほとんどが失敗する（第四期）⁴¹。

革命直後の第一期、狭い意味の日本政府である第二次西園寺公望内閣は、事態を静観していた。同盟国であり中国長江流域に利権を持つイギリスとの協調を重視したからである。その立場は山縣有朋をはじめとする元老や、当時陸軍省で勢力をもっていた寺内正毅の意向にも沿うものであった。日本政府は10月13日、清朝政府から武器援助要請があると即応し、泰平組合（三井物産、大倉組、高田商会）を通じた273万円の兵器・弾薬売込契約を締結した。清朝支援政策である⁴²。

しかし同時期、陸軍参謀本部は内閣とは別の考え方を持っており、しかも参謀本部第一部と第二部とでは考え方が異なっていた。第一部は同年5月に策定済の「対清作戦計画」に基づき、中国に軍事介入し、場合によっては略略上経済上の要所を占領することを考えていた。第二部（宇都宮太郎部長）はむしろ革命派を援助し、新たに出現する共和国と親善関係を結ぶことが日本の利益につながると考えていた⁴³。

武昌蜂起直後から革命派を支援しようとする動きは、外務省のなかにもあった。北京駐在日本会社の伊集院彦吉は、革命派を援助して清朝政府と対峙させることを提案して

いる。また在野で以前から孫文らを支援していた宮崎滔天や頼山陽、また黒龍会の内田良平らは、日本政府や財閥に革命派を支持するよう働きかけた⁴⁴。

この時期三井物産はどのような態度であったか。よく知られているように、内田良平は10月下旬益田孝に書簡を送って革命派への協力を求め、12月に入ると三井物産による革命派への30万両貸付が黄興経由で実現した⁴⁵。李廷江氏の研究によれば、三井によるこの決断においては、井上馨の果たした役割が大きかった。益田孝が井上を訪問して内田の書状を見せると、井上は10月29日原敬を呼び清朝への武器売渡延期と革命派支援を要請している⁴⁶。井上や益田といった三井の上層部は、比較的早い第一期から革命派に同情を寄せていたと考えられるだろう⁴⁷。

さて武昌蜂起が発生したときの盛宣懷の立場はどのようなものであったか。辛亥革命に至る数年間、盛宣懷は慢性的な事業資金不足に悩み、外国からの借款を必要としていた。八幡製鉄所への鉄鉱石供給で深い関係にある日本からの借款が多かったが、前節の井上馨宛て高木書簡⁴⁸に見られるように、日韓併合以降中国国内で反日的な雰囲気が強くなると、欧米資本も引き入れてバランスを取る方向に進んだ。欧米側では特に米国の動きが活発であった。

1911（明治44）年5月、郵電部大臣盛宣懷は、鉄道国有化方針を朝廷に具申するとともに、英、米、独、仏の四カ国借款団との間に600万ポンドの借款契約を結び、川漢鉄道起工と粵漢鉄道完成を企てた。しかし利害が侵されると考えた四川・湖南・湖北・広東の四省は反発し、激しい「保路運動」が巻き起こった。盛宣懷は革命派から攻撃のメインターゲットとされ厳しい批判にさらされた。

清朝は最も過激な四川省に軍を派遣し鎮圧を試みたが、10月10日防備が手薄となった武昌で革命党によるクーデターが成功し、新軍団長黎元洪を革命軍都督とする中華民国軍新政府が樹立されるに至った。清朝は混乱を沈静化するため、10月25日資政院の弾劾決議に基づき、盛宣懷に責任を取らせてその全官職を剥奪した。盛宣懷は文字通り窮地に陥った。

この頃高木陸郎は頻繁に伊集院彦吉を訪れている。伊集院日記に依れば、10月22日～24日まで連続で毎日訪問している様子が残されている⁴⁹。盛宣懷は生命の危険を感じ、10月28日には米独仏英日五カ国連合の警備隊に守られて北京を離れ、外国租界のある天津へと逃れた。官職がなくなったとはいえ清末の最大の実業家であった盛宣懷の歓心を買おうと、日本も含めた列強は競って盛宣懷を保護しようと努めた。その様子を高木陸郎の手記から見てみよう。

支那政府でも驚いて盛に郵電部大臣を辞せしめ、彼を国外に亡命させることとなったが、たとえ失脚したとはいえ、盛の実業的勢力は依然として素晴らしいものがあり、各国がこの場合の盛を拉致することによって、盛の勢力へ食い入ろうとしたことは言うまでもない。北京から天津までは支那政府が盛のために特別列車を仕立

てて送り出したが、沿線の警護には四か国の兵が^{とれつ}堵列するという騒ぎ方であった。

そして天津から盛をどこへ亡命させるかについては、各国とも露骨に競争をやったものである。最初は日本の船で大連へということに話が出来ていたのだが、そのとき天津に停泊していた日本の船は相模丸で、あまり立派な船ではなかった⁵⁰。しかるにドイツではどうして手を回したのか、アドミラル・テイルピッツという最大優秀船を回航して来て、巧みに盛をこの船に乗せ、青島へ連れ出すことに成功してしまっただ。切齒扼腕したが手遅れで何とも致し方ない⁵¹。

別の文章で高木陸郎は、このときの日本政府の対応について下記のように述べている。

盛宣懷はドイツ船のアドミラル・テルピッツという名が軍艦と思つたらしく、その方が安全だというので、どうしてもその船に乗ろうという、しかし日本政府からは「何とかして日本へ連れて来い」と命令して来るようなわけではなかつた。ともかくも北京を発つこととなったが、天津までの沿線で停車場又はレールに爆弾が仕掛けてあるかも知れないというので無論日本からも兵隊を出す。伊集院公使や松方氏が私に対して「政府で君の生命保険を十万円でも二十万円でも付けて置くからは是非行って呉れ」というし、費用は正金銀行で幾らでも出すという。それでは正金銀行の人を誰か連れて行こうというので行員の川上市松という人を同伴した。北京支店長の実相寺貞彦君も天津まで送って来たが、いずれも決死の覚悟で出掛けたものである。⁵²

盛宣懷が支配する漢冶萍公司をはじめとした権益は全ての列強にとって魅力的である。盛宣懷は各国とも是非手元に押さえておきたい人物であった。ここに盛宣懷争奪戦が発生した。免職後の盛宣懷はまず正金銀行北京支店長実相寺貞彦宅に身を隠し、その後塘沽経由で大連へと向かう予定であったが、それを察知した米国は、奉天総領事ウィラー

D・D. ストレートや、盛宣懷の米国人秘書ファーガソンらが、四カ国借款団を勧誘して巻き返し、10月28日、盛宣懷は米国が用意した列車で北京から天津に向かった。

伊集院は同日の日記で、これは「米国一派の陰謀」であると嘆き、翌日英国公使館を訪問した際にも「全くストレート一派にやられたるを悟り」と書いている⁵³。この段階で日本は、盛宣懷をめぐる争奪戦において、米国を中心とする四カ国側に先を越され、受動的な立場に置かれることとなった。

10月29日盛宣懷は天津からドイツの汽船提督号に乗り込んだが、随員は高木陸郎および別の中国人1名であった。まず船は大連に向かったものの港内には入らず、芝罘（煙台）経由で青島に向かった。この段階で盛宣懷は、自身の地盤がある上海の安全を確かめたうえで、そちらに向かう予定であった。船中の盛宣懷は意気消沈した様子であったという⁵⁴。

当時の山東巡撫孫宝琦は盛宣懷の親戚にあたる。孫は盛に書簡を送り、最適の逃避地は青島であると薦めた⁵⁵。盛宣懷が青島に到着したまさに11月3日、上海では陳其美ら革命派の蜂起が成功し独立を宣言、武昌蜂起に匹敵する衝撃を内外に与えた。盛宣懷は上海行きを諦め、青島グランドホテルに長期滞在することとなった⁵⁶。ドイツ租借地である青島に盛宣懷が滞在し続けることは、日本が盛宣懷争奪戦に敗れ、盛に対する影響力が消がれることを意味している。

ここから日本側は巻き返す。まず盛宣懷が避難中に自由に使える資金として7770両余りを無償提供した。その具体的な方法は、高木陸郎と正金銀行の川上市松が考え出した。同行が盛宣懷に対し持つ貸付金45万両の手形期日を6か月延長し、直近に返済された6万両の金利を逆算し、盛宣懷に返金したのである。11月10日、高木陸郎は青島から横浜正金銀行北京支配人実相寺に、本件を説明する手紙を送っている。盛宣懷への7770両は三井物産青島支店が支払い、正金銀行は三井物産アカウントに同額を入金した⁵⁷。

翌11月11日、盛宣懷は三井物産青島支店に依頼し、日本政府に対し自身への支援を要請する電文を発信している。特に元老山縣有朋、前首相桂太郎、そして内田外務大臣の支援を期待したものであった。発信者はもちろん高木陸郎である。英文と日本語が混じった独特の電文であるが、全て日本語に翻訳すると下記となる⁵⁸。

青島出張所 1911（明治44）年11月11日 午後6時30分 発電

盛宣懷より、下記電文につき、外務省、桂公、山縣公へ伝えてほしい旨要請があつ

た。上海からの電文によれば、資政院は摂政王に、現在の問題を招いた指導者を処罰するよう提案した。摂政王はこれに同意し、大理院に検討するよう指示をした。盛宣懷はこの処罰につき四国借款の責任者に対して行われるだろうと見ている。これに対し既に4、5カ国列強の大臣が抗議をした。資政院の同弾劾上奏案では、日本の借款を最も強烈に非難しており、また萍郷の一件から漢陽（鉄廠）も非難され、盛宣懷は日本と手を結んで密かに中国を破壊しようとしたとして非難された。これは明らかな排日である。我々は貴方に、この際遅滞なく清国政府に強烈に抗議することを望む。我々は双方の利益のため貴方が最善を尽くすこと、またこの電文が貴方の最善の努力を生じさせることを信じる。

要するに盛宣懷はこの電文のなかで、山縣有朋、桂太郎、外務省に対し、清朝慶親王内閣が武昌蜂起以降の混乱の責任を自分に負わせ、また国会に相当する資政院でも弾劾決議案が上程され、自身が危機的な状況に陥っていることを訴えるとともに、その弾劾の理由は日本をも非難する排日的なものであると強調している。そしてこの清朝の処置に対し、日本政府が抗議することを望んでいるのである。

この電文は三井物産本店を経由し、当時久留米に滞在していた山縣のもとへ速やかに届けられた。2日後の11月13日、山縣は内田外務大臣に対し、盛宣懷と日本とは特別な関係を有するため、十分に庇護するよう要請している。なお前述の通り、辛亥革命直後の第一期の元老山縣有朋は、西園寺内閣をはじめ大方の日本政府と同様、事態を静観する清朝支援派であった。

明治44年11月13日 在久留米松井参事官より内田外務大臣宛(電報)

「山縣公より盛宣懷の保護に付依頼ありし件」

第7号 山縣公は盛宣懷より三井を経て同公桂公及閣下宛ての電報写を本官に示され盛は日本と特殊の関係を有したるものなれば帝国政府は此際充分之を庇護する様適切の手段を執らるる様致したしと閣下に対し電報方依頼あり尚御処置の結果同公の為め電報ありたし⁵⁹

伊集院彦吉の当日の日記を紐解くと、先程の三井物産青島事務所からの電文は、在北京日本公使館に転電されていたことが確認できる。また同電文においては、盛宣懷自身に危険が迫っているかのような緊迫した文面になっていたが、伊集院が英国公使館と確

認したところ、そのような事実はないと確認している。また翌日伊集院が清国総理大臣の愛新覚羅奕劻（慶親王）を訪問し、大理院が盛宣懷を処罰する決定をした事実はないと聴取している。

十一月十三日 曇

盛宣塊^{ママ}より本省へ、同氏は資政院の請求により大理院に於て厳刑に処せらるるもの一人成り居り危険迫り、一面には排日の傾向あれば、日本より抗議あることを申出たる趣なり。大理院のことは未だ聞く処なく、要するに李等が漢口に於て最近同地を立退たる等の事より、今更疑念を抱き、此上一身の保安を日本政府より保証を得んとするものと思したるも、午後英公使に何等聞く所なきやを尋ねたるに、果たして一向に更に危険の加わりたるを承知せず。

十一月十四日 曇

午後四時半、慶親王を訪問、高尾を通して大体の話をなし、……又宣^{ママ}の大理院にて処罰の事を尋ねたるに、決して其事なきこと明言を得たり。時局困難に際老齢の王は案外に元気なるを認めたり。⁶⁰

上記の電文が打たれた11月13日頃、山縣有朋は益田孝から別の書簡を受け取っている。その書簡で益田は、盛宣懷が無事に上海に到着したと誤報している。列強各国が盛宣懷の奪い合いを展開するなかで様々な情報が飛び交い、混乱していたことを示していると言えよう⁶¹。

さて高木陸郎は、盛宣懷秘書として三井物産を離職していたが、1911（明治44）年5月23日および1913（大正2）年8月1日の三井物産職員録を見ると、「罷役」として高木の名前が載っている。すなわち高木は三井にも籍を残しており、引き続き給与が支払われていた可能性が高い。連絡手段としての電文は上述の通り三井物産の各支店を使用し、電文暗号も全て三井のものを使用していた⁶²。

三井物産が辛亥革命第一期、10月中旬には早くも井上馨、益田孝らにより革命支援を決断していたことは既にみた。しかし高木陸郎はこのとき、元来の所属元である三井の意向を離れ、清朝を支援する日本政府の意向に沿って行動していたと言えるであろう。

盛宣懷争奪戦において、盛を日本政府の影響下に奪回する最後の要因を作ったのもまた高木陸郎であった。盛がこのとき最も恐れていたのは、清朝や革命軍政府が自身の持つ膨大な私財を没収することであった。しかし結局これらの私財は、一時的に日本人の名義に移すことで保護されることとなった。その名義を貸した人物こそ高木陸郎である。高木は後年以下のように回想している。

その後私は、盛宣懷の上海の土地家屋、蘇州に在る留園という花園、芝罘にある柞蚕の紡績など、其の他かすかすの彼の所有する全財産を（一時的に）私の名義にすることにしたので、私の店の者を盛宣懷の家に入れたり、蘇州の留園の番人に入れたりしたものである。それから後、私は一時品川の方に家を借りて、中国人の知人の留学生を預っていたことがあるが、李維格の息子などもこの私の家に居ったものである。⁶³

盛宣懷の曾孫である盛承洪氏が2014年7月に筆者に語ったところでは、盛宣懷の膨大な資産がこのとき一時的に高木の名義となって守られたことは、盛家内でも語り継がれていると言う。盛宣懷が高木陸郎個人に寄せていた信頼がいかにか大きいものであったかがわかるであろう。

いずれにせよこのような日本側の努力は功を奏し、盛宣懷は日本に傾いていった。12月14日、盛宣懷は青島から、日本の勢力下にある大連に移った。そして大連では、日本政府と盛宣懷とで漢冶萍会社の合併予備交渉がスタートするのである。

ちょうどこの頃イギリス主導の南北停戦が実現し、辛亥革命は第一期から第二期に移り変わろうとしていた。また井上馨、益田孝ら三井物産上層部が早期から企画した黄興経由の革命派向け融資30万両は成立を迎えていた。そのような状況下、盛宣懷は神戸に移ることを決め、12月31日に大連を出港した。高木陸郎も随行した。1月3日、盛宣懷一行二十名が無事に神戸に到着したことを、服部一三兵庫県知事が内田外務大臣に電文している。

明治45年1月3日 兵庫県知事より内田外務大臣宛(電報)

「盛宣懷一行二十名神戸到着の件」

至急 清国元郵電部大臣盛宣懷一行二十名本日午後11時汽船台中丸にて着神 県下塩屋「オリエンタルホテル」投宿せり⁶⁴

このときが、列強が相競った盛宣懷争奪戦に日本政府が勝利した瞬間であった。そしてその最大の立役者は高木陸郎であったと言って差支えなからう。

おわりに

産業革命以後、製鉄業は国家の命運を左右する重要な産業となった。19世紀の欧米列強は国家的事業として製鉄業の発展を企図したが、その状況は20世紀を迎えたばかりの日本にとっても同じであった。その象徴として1901（明治34）年官営八幡製鉄所は操業を開始したが、その主要原料である鉄鉱石は、多くを盛宣懷保有の大冶鉄山産出の鉄鉱石に頼っていた。日本にとり大冶鉄山を含む漢冶萍公司是、国家的重要性を持つ取引先企業であり、その所有者盛宣懷は最重要人物のひとりであった。

武昌蜂起が発生した1911（明治44）10月の段階で、わずか数か月で革命派が清朝を倒し、共和制国家を打ち立てると予想したものは少なかった。西園寺内閣の初期の公式方針は、清朝支援を基本とし、事態を静観するというものであったが、陸軍参謀本部第一部は積極的な軍事介入を模索し、同第二部は当初から革命派支援を志向し、また民間勢力にも革命派を支援する動きがあった。

そのいずれの勢力にとっても、漢冶萍公司与盛宣懷が持つ重要性は同じであった。したがって盛宣懷が清朝政府内で失脚し、海外亡命を欲したとき、日本は是非とも盛を保護し、その影響下に置きたいと考えた。しかし他の列強もまた同様に考えており、ここに盛宣懷争奪競争が発生した。

日本政府はイギリスとの関係を重視する立場から表面に出ることを避け、盛宣懷を保護下に置くために、従来からビジネスを通じて盛宣懷と強固な関係を築いていた財界、特に三井物産と横浜正金銀行に期待をした。そこで盛宣懷の秘書という立場にあった三井物産の中国通、高木陸郎が大きくクローズアップされることとなった。

高木陸郎は、その後大正から昭和前期にかけて、中日実業副総裁との肩書で、日本を代表する中国通経済人と看做された人物であり、その言論は日中双方に影響を与えた。高木陸郎が、その後大きく世に出る切掛けとなったのが、まさにこの若き日の盛宣懷争奪戦における活躍であった。

盛宣懷争奪戦は、実質的には米国と日本の争いであった。一時は米国側が、盛宣懷をドイツ勢力下の青島に連れ出すことに成功し、日本は劣勢に立たされた。しかし高木陸

郎の活躍で、日本は巻き返し、最終的に盛宣懷は日本に亡命することとなった。1912（明治45）年1月24日より盛宣懷の日本亡命先である神戸において、盛と日本側の漢冶萍公司日中合弁化交渉が行われた⁶⁵。同時に南京でも孫文、黃興ら革命新政府と三井物産間でも合弁化交渉が行われ、合弁仮契約の調印を見た⁶⁶。その理由のひとつには、盛宣懷が日本亡命中で、日本の保護下にあったことが影響していると筆者は考える。

資源小国日本が重要原料を中国大陸に求め、様々な策動でその確保に努め、中国の実力者を日本の影響下に置いたうえで、自身の権益拡大を目指す方策は、その後の日本の大陸政策で繰り返し現れるパターンである。

盛宣懷はその後神戸で10か月の亡命生活を送り、1912（大正元）年に10月に再び上海に戻った。翌1913（民国2）年には漢冶萍公司社長兼董事長、招商局董事会主席として復活した。1915（大正4）年の対華二十一条要求で、日本政府が漢冶萍公司合弁化問題を強引に迫る様子をみながら、盛宣懷は1916年（民国5）年に71歳で死去した。

1913（大正2）年に総裁を孫文、副総裁を倉地鉄吉（外務次官）として設立された日中合弁会社「中国興業」は、紆余曲折あり「中日実業」と名前を変え、1922（大正11）年11月24日、副総裁の座が倉地鉄吉から高木陸郎へと移った。高木陸郎が42歳のときである。高木はその後、日中関係が激動を迎える1930年代、日本に蔓延する中国蔑視や下等国視を戒め、急速に近代化している中国を正しく理解するよう訴え、日本だけではなく中国の論壇にも影響を与えた。

本稿において、高木陸郎と盛宣懷の関わり、特に辛亥革命後の盛宣懷日本亡命時に、高木陸郎が果たした役割を明らかにした。関連する先行研究を基礎とし、日本の元老や政治家、外交官等、出来るだけ多くの一次史料、また盛宣懷の公刊史料に当たるとともに、上海図書館が主有する未刊行史料「上海図書館盛宣懷档案」にも当たり、網羅的に描いた。

しかし盛宣懷以外の中国側史料には触れていないほか、中国の先行研究の確認は不十分である。また主に日本と盛宣懷争奪戦を争った米国関連の史料や、また争奪戦の転換点となった青島に関するドイツの資料も未見である。またさらに重要な限界として、高木陸郎が所属していた三井物産幹部の考え方、高木の動きとの相違点についても未解明である。

戦前期の重要人物である高木陸郎に関する研究は不十分であり、今後さらに高木研究が進められ、その全体像が解明される必要がある。また同時に、辛亥革命直後に起きた

列強による盛宣懷争奪戦と日本亡命に関する研究も、様々な角度からさらに立体的に解明される必要があるだろう。

-
- (1) 雑誌記事のデータベース（皓星社「ざっさくプラス」）で、高木陸郎による多くの記事を確認できるほか、誌上討論会にもしばしば登場する。また著作としては、『北支那に於ける列国權益』（学芸社、1936）等がある。
 - (2) 『申報』第12版、第22753期、1936（民国25）年9月3日、に「日本的對華國策：從軍事的轉向到外交的 從政治的轉向到經濟的」という記事があり、高木に関して以下の記述がある（拙訳）。

「高木陸郎は、日本資本家中有数の「中国通」である。高木は8月15日の『外交時報』に「最近支那の動靜」という論文を掲載し、また、『文藝春秋』本年九月号に、「蔣介石の資金網」なる論考を発表した。両文章とも大意は同じで、鉄道、道路、銀行制度、幣制改革、郵便貯金、政治統制、科学の応用などの分野における、中国近年の進歩を列挙し、日本人に中国への認識を改めるよう要望している。高木は、新中国に目を向けようとなしな人々によって日本の對華政策が掣取りされることは、日本の進路を誤らせるものだと論じているが、これは吾人（『申報』記者）平生の主張と一致するものである。」
 - (3) 国立情報学研究所の学術論文データベース「CiNii」での検索で、1本もヒットしないことをその根拠としているが、それ以外で高木陸郎を専門に扱った論文が存在している可能性は、もちろんある。
 - (4) 高木陸郎の自伝である『私と中国』（高木翁喜寿祝賀会、1956）の記述のほか、人事興信所編『人事興信録』で確認できる。
 - (5) 久保田文次監訳『中国近代化の開拓者・盛宣懷と日本』（中央公論事業出版、2008、以下『盛宣懷と日本』）46頁。盛宣懷の日記で、高木陸郎が初めて盛に会ったのは、1908（明治41）年9月4日であったことが確認できる。
 - (6) 盛宣懷から井上馨へ高木陸郎の秘書就任を要請する書簡は、国立国会図書館憲政資料室所蔵「井上馨関係文書」第33冊 625-7、井上馨が快諾する返書は、前掲、『盛宣懷と日本』、372頁、で確認できる。
 - (7) 彭義「盛宣懷実業活動研究」（東京外国語大学博士論文、2000）の盛氏企業集団構成図が詳しい。また近年は盛宣懷が教育者としての側面も見直されている。中国最古の大学である北洋大学堂（現天津大学）、二番目に古い南洋公学（現上海交通大学）とも、盛宣懷の創建である。実務人

材の養成がその眼目であった。

- (8) 山本条太郎翁傳記編纂會編『山本条太郎（傳記）』三秀舎, 1942, 259頁。
- (9) 清国公使伊集院ヨリ内田外務大臣宛電報「盛宣懷革命党ノ危害ヲ恐レ塘古ニ赴キタル件」『日本外交文書第44巻（辛亥革命）』第二二一文書 144頁。
- (10) 上海図書館は膨大な盛宣懷関連史料「盛宣懷档案」を保有し、その一部を現地にて公開している。複写・撮影等が禁止されているため、その利用は現地へ赴いて筆写するほかなく、日本の研究者には利用しにくいのが、未発見の貴重な資料も多く含まれていると思われ、今後の研究が待たれる。
- (11) 前掲、『私と中国』。
- (12) 六番目の子息と言う意味で陸郎（六郎）と名付けられたが、兄2名は夭折したようで、1943年の人事興信所編『人事興信録』によれば、高木陸郎は父惟矩の四男とされている。なお子息の名前に数字を振る方式は高木陸郎自身も踏襲し、自らの長男を惟^{これつね}常、次男を惟^{これじろう}次郎と命名したあと、3男を三郎、4男を四郎と続けている。3男の高木三郎氏は音楽家であり、戦中は学徒出陣のうへ海軍少尉を務めた。高木三郎氏は、2007年に文芸社より回顧録『潮時はいっ？ 大正・昭和・平成に生きて』を出版したが、同書には父陸郎に関する言及もある。
- (13) 人事興信所編『人事興信録 第14版 下』（人事興信所、1943）タ 101。
- (14) 東京商工中学校は私立の予備門で、主に東京高等商業学校（現在の一橋大学）へ人材を輩出していた。その後私立赤坂中学校となり、現在では日大三高がその系譜を引いている。
- (15) 東京商会は1917（大正6）年創業の化学品専門商社の老舗。もともとは三井系であったが、戦後は三菱化学の傘下に入り、現在でも有力な三菱系化学品商社として存続している。
- (16) 九州鉄鉄の詳細は不明であるが、弟の高木陸郎が作った会社であるようだ。前掲、『私と中国』85頁に、「当社〔東亜通商〕の全盛時には素晴らしい利益を挙げたものだ、九州鉄鉄株式会社を作る時など安川敬一郎の代理松本健次郎と商議して株式は安川と私とが同率で持たされる状態であった」とある。
- (17) 前掲、『私と中国』、206頁。
- (18) 坂本雅子『財閥と帝国主義：三井物産と中国』（ミネルヴァ書房、2003）70頁。
- (19) 前掲、『私と中国』、39頁。
- (20) 例えば、前掲、「盛宣懷実業活動研究」では「盛宣懷は清末の最も重要な実業家であったにもかかわらず、彼を詳しく取上げた研究はあまり多くない。彼の凄まじい蓄財ぶりが人々に嫌われた

ことや、国民党・共産党の両政権から高く評価された辛亥革命が彼が中心となって強行した幹線鉄道の国有化政策によって惹き起こされたことなどの理由から、彼は研究者に敬遠されていたからである。」とされている。

- (21) 村田雄二郎「グローバリズムの中の辛亥革命」『総合研究 辛亥革命』（岩波書店、2012）7頁。
- (22) 塚瀬進「辛亥革命期における漢冶萍公司日中合弁問題について」『中央大学大学院論究（文学研究科篇）』第18巻第1号（中央大学紀要、1986）77頁。
- (23) 久保田裕次「日露戦後における対中国借款政策の展開—漢冶萍公司を中心に—」『日本史研究』第589号、2011）22—23頁。
- (24) しかし漢冶萍公司の新たな投資家集めは難航し、目標の2000万元に対して、最終的に1911（宣統3）年の辛亥革命までに集められたのは、目標を700万元下回る1300万元にとどまった。前掲、「盛宣懷実業活動研究」110頁。
- (25) 白井勝美「日本と辛亥革命—その一側面」『歴史学研究』第207号（青木書店、1957）50頁。
- (26) 前掲、『盛宣懷と日本』、12頁。
- (27) 盛宣懷が井上馨に対し高木陸郎の秘書就任を要請した書簡のなかで、「高木六郎前年随往若松等處譯亦頗見詳明」とし、高木陸郎の語学力が高かったことを招聘理由のひとつに上げている。国立国会図書館憲政資料室所蔵「井上馨関係文書」第33冊625—7。
- (28) 愚斎は盛宣懷の号。
- (29) Pacific Mail Steamship Company 社のS.S.Korea号（前掲、『盛宣懷と日本』、40—41頁）。
- (30) 上掲書、51頁。
- (31) 深沢暹（1871-1944）外務省書記生。上海、漢口、奉天等に勤務。1925年吉林総領事で退官。
- (32) 『東京朝日新聞』1909年2月10日朝刊4頁。
- (33) 村上勝彦「長江流域における日本利権」、安藤彦太郎編『近代日本と中国』（汲古書院、1989）135頁。
- (34) 上掲書136頁。
- (35) 前掲、「井上馨関係文書」第33冊625—7。
- (36) 前掲、『盛宣懷と日本』、372頁。

盛宮保閣下 敬復者捧誦

また幸いにも高木陸郎が計らずも閣下のお目に止まり、しばらく三井を離れ〔秘書として〕閣下の下で仕事をするようご採用頂きました。この件につきましてはすでに三井と協議し、快諾

を得ました。現在彼を派遣し、閣下のもとに行かせますので、よろしく指導のほどお願い申し上げます。閣下の下で働くことで、将来の人員の交流や貿易に益々良い成果につなげることができるでしょう。

井上馨 謹啓 正月二十七日〔1910年〕

- (37) 高木陸郎書簡井上馨宛（明治43年9月5日）「井上馨関係文書」（国会図書館憲政資料室蔵）第27冊174-1。なお本史料轉寫には小山俊樹氏、島田大輔氏に多大なご協力を頂いた。

謹啓 残暑の砌閣下益々ご清祥の御事と奉遥賀候。過般帰朝中は様々御厚庇を忝ふし御芳志の段に忝く御礼申上候。扱て御委嘱の盛宣懷氏への書翰上海にて面通致候心組に候へし処、政府の召命により北京に出発致したる跡に候へしにより一ト先づ漢口に帰任、用務を片附け去月二十六日当北京に参り早速盛氏に面談、貴翰を面通仕り候。盛も貴翰拝読後貴意の在る処も了し其根本的解決をなす為め当局者に面渉を要する御来示にも誠に御同感なれど、渡日の事は今直ちに御確答も申し上げ難く、明春末より夏にかけて事情が許すなれば渡日致し度何れ其意味にて御返書認むる事と致す可しと申し居り候が實際に昨今の情勢の為め四月盛が閣下に一書を差上げ候時と大分趣を異にし居るものあり。即ち日魯協約に引き続き韓国併合の事あり。北京の朝野は清国の将来韓国の覆轍を見る可く、口に保全を唱ふるあるも頼むに足らずと日本に対しても殊に疑惧戒嚴の念を抱き、野心ある第三国又之れを好機として離間中傷をなすありて此際日本に近邊せん事を云ふものあるも耳を籍すもの無し。二三有識者の其協約、併合の止むを得ざるに出でしものなる事を知るあるも之れを言ふも聴くもの無し。盛の位置として之れを唱ふも徒らに他の悪感を招くに止まるが如き現状に候より今暫らく形勢の推移を待ち、此恐目的感念の去りたる後徐ろに事を策する様致したしとて盛及盛幕下の親日派の唱ふる処に御座候て貴翰に對し何等具体的に歩を進めたる御返書を差上ぐる能はざる所以茲に因するに候。公使より聞く処によるも今後当分清国を圧迫す可き何等懸案も無き事故日本に対する疑惧も遠からず氷解せしむる事を得可しとの事に候へば、今日の処暫らく形勢觀望を以て尤も策の得るものならんかと存じ候事に候。尚〔向〕後盛の事業たる漢陽鉄廠、萍鄉炭鉱、大冶鉄鉱も時勢の推移に連れ近く第二期大拡張の計画に着手せざる可からざるに候て、其拡張に要する資金約一千五六百万圓を要するに候が、盛等の意と是れまでの関係もあり先づ之れを日本に計らんと欲するに候も、前記の如き北京の状勢に候より之れが資を日本に籍らんとする事を提議すれば徒らに北京朝廷の疑惧を増大せしめ（現に八百万圓日本より資を籍り居るもの、此上に又日本より資を籍らんとせば日本に負ふ所甚だ大にして他日吞噬の厄に逢ふ恐れありと云ふに候。八百万圓とて御承知の如き興業銀行の手よ

り三百万圓、正金より二百万圓、大倉の手より二百万圓、三井の手より壹百万圓、計八百万圓なるに候 計らずも盛自身の地位をも危ふするものに候より今暫らく之れが提議を見合はす事と相成り居り候へ共明年春頃までには早晩之れが提議を見可申、当方の考にては彼の今季議会の若松製鉄所より提出せんとする拡張予算、議會を通過せる際に必然鉦石鉄鐵増購の議も起り可申ければ之れを機として漢冶萍の拡張計画を發表し以て日本より資を籍るの口実を得せしめば、さすれば第三国の挑唆も其効なかる可く必らず之れを我々に倚らしむる事を得ること確信罷り在るに候。此辺の委曲当地公使よりも当局者に向け申通ぜらるゝ事と存じ候へ共、尚〔向〕後該予算通過並に其資金供給等に就きても自然閣下の昇力御配慮に俟たざる可からざる事と存ぜらるに候。彼の米国資本家側に於ては十五年間鉄鉄、鉦石購入前貸金として低利の資金を供給せんと盛よりの具体的提議を俟ち居る如き形勢有之に候。若し一朝之れが米の手に落つる様の事と相成り候ても、大冶、漢陽、萍鄉は又日本の勢力圏内の者に非る事と相成り可申、何卒其辺も御考慮の内に御加心置き被下候て、此上ともよろしく御配慮の程偏に御願申上候。何れ詳細の事情は手紙にては尽くし難く候に付十一月末頃社務の都合を見帰朝御面述申上度致し居るに候。小生当地の用務も一通ふり片付き申候に付不日出発歸漢の途に就く筈に御座候。盛より閣下への御返事は茲二三日中に出来上る筈に付何れ入手のとき翻譯文相添ひ送り可申上候。先右のみ不取敢申上置度如此に御座候。 謹言。

九月五日 在北京 高木陸郎。

井上侯爵閣下。

- (38) この三井物産 50 万円借款に関する史料が上海図書館に残されている。上海図書館盛宣懷档案、請求番号(索取号)089623、高木陸郎致益田孝便条。便箋には「上海朵雲軒監製」とある。高木陸郎の益田孝宛て書簡の原稿メモで、本来下書き用原稿は書簡清書後に焼却されるはずであるが、高木が上海のホテルの一室でしたためたメモが、意外な形で残されていた。盛宣懷サイドに故意に盗まれたか、偶然にも拾われたか、あるいは高木自身が参考情報として自ら盛宣懷に渡したもののか、いずれにしてもメモは盛宣懷に渡り、盛宣懷関連資料の中に保存されていた。

〔益田孝殿 底稿 高木

盛宣懷借款五十万圓ノ件、日本ノ何種ノ株券ヲ買入レルヤハ未定ナルモ兎も角上海ノ土地及招商局株券ヲ抵当トシ期限一ケ年利息ハ「市場日歩」〔Current Rate〕△ト云フ事ニテ取り極メ度シ。当地三井銀行支店長ト契約取り交ハシ差支ナキ様御指図求ム。

(△似シ全圖交付ハ上海ニテ株券ヲ交付シ土地名義書替終了後)。

益田の意向で、漢冶萍公司ではなく、上海の土地と招商局の株券を抵当に入れるように盛宣懷

に迫っている様子がわかる。また借入契約の金利は、契約時に確定させる固定金利が通常の形態であったが、三井物産側により有利な市場金利連動の変動金利で提案している。

- (39) 櫻井良樹「辛亥革命と日本政府の対応」王柯編『辛亥革命と日本』（藤原書店、2011）。
- (40) 白井勝美「辛亥革命—日本の対応—」日本国際政治学会編『日英関係の史的展開＜季刊国際政治 58号＞』（日本国際政治学会、1978）13頁。
- (41) 久保田裕次「辛亥革命 100年と日本近代史研究の現状と課題」『歴史科学』第212号（歴史科学協議会、2013.5）34-45頁。
- (42) 齋幸淳『辛亥革命期の中日外交史研究』（東方書店、2002）19頁。
- (43) 前掲、「辛亥革命と日本政府の対応」、34-35頁。
- (44) 前掲、『辛亥革命期の中日外交史研究』、76-83頁。
- (45) 黒龍会編『東亜先覚志士記伝＜中＞』（原書房、1966）440-441頁。
- (46) 原奎一郎編『原敬日記＜第三 内務大臣＞』（福村出版、1981）181頁。李廷江『日本財閥と近代中国』（御茶ノ水書房、2003）208-209頁。
- (47) 前掲、『辛亥革命期の中日外交史研究』、79頁。
- (48) 前掲、高木陸郎書簡井上馨宛（明治43年9月5日）「井上馨関係文書」。
- (49) 尚友倶楽部編『伊集院彦吉関係文書 第1巻＜辛亥革命期＞』（芙蓉書房出版、1998）83-85頁。

十月二十二日 晴 日曜日なりしも各地より電報あり。高木陸郎君来訪。漢陽鉄廠の件^{ママ}宣宮保へ交渉の打合をなす。

十月二十三日 曇 朝高木、実相寺両君来館。鉄廠の件^{ママ}宣宮保に交渉の件を協議す。

十月二十四日 晴 風 高木君来訪。宣宮保に於ては大分進み居るとの事。然るに是には本邦より大金を直に借り入れんことを希望し居るものなれば、交渉は容易には纏まらざるべきか。

余の意見を述べ相当の勢援を約して別る。^{ママ}

- (50) 高木が回想録で記述している「相模丸」は記憶違いで、日本外交文書によれば「福星丸」が正しく、三井物産が手配したものであった。
『日本外交文書第44巻（辛亥革命）』第二二一文書 144頁。

「盛宣懷革命党の危害を恐れ塘沽に赴きたる件」

明治44年10月28日 在清国伊集院公使より内田外務大臣宛(電報)

第三四九号 同地より福星丸(三井物産会社代理店のなり)にて直ちに大連に赴くか又は英国汽船若くは独逸船にて一先上海に向かうべきかは未定なり。

また松浦章氏の研究によれば、「福星丸」は789トンで、大連を本拠とした北清輪船会社の所有であった。一方のドイツ船「提督号」が何トンであったのかは不明である。松浦章氏「北清輪船会社の汽船による渤海航運について」(『近代言語接触研究会—或問』第21号、2011)22頁。

(51) 前掲、『山本条太郎(傳記)』、259頁。

(52) 前掲、『私と中国』、109頁。

(53) 前掲、『伊集院彦吉関係文書 第1巻<辛亥革命期>』、88-89頁。

(54) 『日本外交文書第44巻(辛亥革命)』第二二三文書147頁。

明治44年10月30日 在旅順関東都督府白仁民政長官より内田外務大臣宛(電報)

「盛宣懷高木陸郎の随行にて大連に寄港せし件」

秘二〇号 本日正午独逸汽船「提督」号天津より大連に来れるが盛宣懷乗込居り随行は支那人1名と高木陸郎なり 高木の談に依れば一行は同船にて芝罘に寄港し青島に赴き上海が状況危険なきを確かめたる上同地に至る予定盛宣懷は船長室に在り意気消沈の姿なり盛の家族は三四日の後天津を引揚げる由「提督」号は港内に入らず1時40分出発せり。

(55) 夏東元編『盛宣懷年賦長編(下冊)』(上海交通大学出版社、2004)939頁。

(56) 前掲、『私と中国』、109頁。

(57) 上海図書館盛宣懷档案請求番号(索取号)019346「高木六郎致北京実相寺函(日文)1911年11月10日。

(58) 外交史料館資料『標題 清国革命動乱ニ関スル地方雜報』『内地雜/3 明治44年11月9日から明治44年12月7日』【レファレンスコード】B03050617200。なお、同電文の用紙は、「MITSUI BUSSAN KAISHA, LTD. TOKIO. COPY OF TELEGRAM」を使用していた。

(59) 『日本外交文書第44巻(辛亥革命)』第二三一文書157頁。

(60) 前掲、『伊集院彦吉関係文書 第1巻<辛亥革命期>』、110-112頁。

(61) 尚友倶楽部編『山縣有朋関係文書<3>』(山川出版社、2008)226頁 山縣宗益田孝書簡

盛宣懷は全く突然脚聲即時番兵迄も附せられ候を倉皇正金銀行支店に入り、一昨夜一泊昨夜天津に下り本日上海へ向ひ出發す。只今上海よりの電報に依れば無事に通れて上海に着すとあり。資政院の総て袁の内部運動に依り極端の手段を取りたるらしく、蔭昌は事務多端の名の下

に北京に呼び戻し、袁が海陸両軍の全権を握り、北京内閣も宮中も総て其掌中に帰せしものと見て誤りなし被存候。即ち袁は自ら征討に向ひ、和略的に平定を見るも蓋し数日の内と被存候。西安は革命党に依り確實占領。広東は人民団体相会し自衛の爲め出兵出資に応せずと決議、是には総督も同意せし由。

〔山縣筆〕 十一月十三日頃接手。

- (62) 高木は「私は既に三井を離れていると言ったものの、やはり三井出身のことであり、このときも日本との折衝は全部三井のコード（暗号）を使用していたのだが、それさえ神経の鋭い連中が気にかけたと見え、高木が三井のコードを使うのはいけない。以後は一切正金銀行のコードを使用すること、またこの件に関しての事務は全て各地における正金銀行の事務所で行うこと、というような命令を発してきたなどの滑稽もあったほどである。」と回顧している（前掲、『山本条太郎（傳記）』、259頁）。
- (63) 前掲、『私と中国』、110頁。
- (64) 『日本外交文書第44巻（辛亥革命）』第二五六文書 179頁。
- (65) 小田切横兵正金銀行取締役ヨリ倉地外務省政務局長宛電報「神戸ニ於ケル漢冶萍合弁交渉ノ経過第一回報告ノ件」『日本外交文書第44巻（辛亥革命）』第二七五文書 190頁。
- (66) 前掲、「日露戦後における対中国借款政策の展開—漢冶萍公司を中心に—」、32頁。